

南風

Kagoshima University Library Bulletin

- 1 いま求められる大学図書館の役割(早川勝光)
- 2 (特別寄稿)日本発の電子ジャーナル発信を目指して(大場高志)
- 3 「夏休み子供見学デー」レポート(壽福千代子)
- 4 「産業考古学と斉彬の時代」開催(木場隆司)
- 5 幕末から明治時代の薩摩焼(渡辺芳郎)
- 6 集成館事業を読み解く(長谷川雅康)
- 7 研究紀要の投稿規程における著作権処理に関する調査(宮里昌代)
- 8 e-ラーニングと図書館の接点(大瀧礼二)
- 9 本学関係者著作寄贈図書
- 10 Library News



いま求められる大学図書館の役割

附属図書館長 早川 勝光

はじめに

長年鹿児島大学に勤めていても図書館との直接的な関わりは極めて薄い存在であった。学術雑誌の購入、文献複写の依頼、電子ジャーナルへのアクセスなど、学術研究面においては図書館の助力は極めて大きいものであるが、図書館職員との直接の接触がないためそのことを意識する事はなかった。

附属図書館長に任ぜられたので、大学図書館の役割を把握し、国立大学法人鹿児島大学の「知の宝庫」としての任務を着実に果たしていく方策を考えなければならない。ITの高度化、ネットワークの普及によって大学図書館のサービス形態や任務も大きく様変わりしつつあることを今学習しつつある。

研究支援

大学図書館の最も重要な任務は「研究支援」と「教育支援」である。研究支援の面ではIT技術の発達に伴って支援のあり方が大きく変貌しつつある。既存の学術図書・雑誌などの電子化情報サービス、新規に生産される電子化情報サービス(電子ジャーナル、文献情報データベースなど)の充実が喫緊の課題である。

研究活動は学術雑誌などに出版・広報して初

めて成果と認められるが、その間には審査・評価の過程が伴う。学術論文においては研究成果の学術的価値を自己評価し審査員や読者を説得する必要があるが、そのために欠かせないのが既報の学術情報である。高度に発達したネットワーク下では、既報情報を見落とす事は致命的な欠陥とみなされ、審査員に学術的価値を納得させることは困難である。電子ジャーナルや文献情報データベースの充実が求められる所以である。電子化情報資源の大学間格差は研究成果の格差にも深く関わっている。

電子化情報は、学内すべての研究者や大学院生が研究室に居ながらにしてアクセスできる学内共同利用資産であるので、大学のインフラとして計画的に整備することが必要である。冊子体に比べてより多くの利用が可能になるので、電子媒体の整備は投資効率の高い経費のひとつである。

教育支援

教育支援においては、大学レベルの学習に必要な図書、視聴覚教材の整備と充実はもちろんのこと、利用しやすい環境を整備することも重要である。利用時間の延長、狭隘化した桜ヶ丘分館・水産学部分館の拡張が利用者より求めら

れている。また、蔵書数 125 万冊の有効利用を図るためには、そのオンラインカタログの作成が欠かせない。図書館ではその努力を続けているが、やっと半数に達した状態である。日本国内だけでも年間に膨大な図書が発行されている。潤沢とはいえない資金による図書購入には限度があり、公共図書館や他大学図書館との蔵書構成の棲み分けと相互利用の拡大、また既存図書の利用拡大を図ることも必要である。鹿児島大学附属図書館の呼びかけに応じて、県内の大学図書館と、県立・市立図書館がいっしょになって相互利用のありかたを検討する組織が発足しようとしている。

大学の図書館ではベストセラーなどの一般書を購入する財政的余裕はない。それらは公立図書館に依存する事になる。人間としての教養は、授業のような学校教育ばかりでなく、一般書の乱読から身につける場合が多いと考えられる。公立図書館と連携して鹿児島大学生が利用しやすい環境を提供できるようにするとともに、図書館司書という多数の図書館専門家集団を有する附属図書館は、公立図書館で増加しつつある「調査・相談」で市民のニーズで貢献することも必要であろう。

地域貢献

鹿児島にある国立大学法人鹿児島大学には社会・地域貢献が強く求められている。知の宝庫である附属図書館もその学術資源を地域の人々の利用に供し、また生産される研究成果や固有の資源をひろく世界に発信する必要がある。特に国内・国際的な学術研究に資するためには、他の学術機関が行わない貴重な独自資料を収集し、電子化してコンテンツを発信することも大学図書館に求められる任務のひとつである。

鹿児島県では奄美地域に散在する歴史資料の調査を3年間にわたって行っている。江戸時代の薩摩藩支配下で奄美地域の資料は、ほとんど廃棄・消滅されたと思われていたが、調査の結果約1万点に及ぶ新しい資料が発見された。琉球王府からの辞令書など学術的価値の高い資料も含まれている。鹿児島県歴史資料センター黎明館、県立図書館と共同してこれらの調査資料をネットワーク配信できるようにする共同事業

が企画されている。

玉里島津家より購入した玉里文庫をはじめ鹿児島大学のもつ貴重資料の一般市民への公開展示事業も第6回目を迎えた。今年は出水市教育委員会の協力を得て、本館と出水市で公開展示する。歴史に学びつつ新しい課題に取り組むことは、個人・組織・団体・国家にとって必須のことである。参観する子どもたちには夢を、指導者層には課題解決の糸口を提供できるものとなることを願うと共に、今年の企画である「絵本を旅する」公開展示を楽しんでもらいたい。

児童生徒、幼児の教育では学校図書館や公立図書館をとおして「読み聞かせ」や「朝読み」など多数な地域と連携した取組がなされている。大学図書館が所蔵する資料は児童生徒にはレベルが高すぎるものである。したがって、附属図書館が可能な貢献はないものと考えていた。今年の夏に政府が行った「夏休み子供見学デー」に参加した。図書館にふさわしい内容を種々検討した結果、図書館資料を調査するスタンプラリーを行った。図書館資料を調べればすぐ解答できる問題を作成し、その資料が存在するいくつかのポイントへ案内して解答を探し出すものである。各ポイントには図書館司書である職員が情報探しの相談にのった。ネットワーク利用のポイントではインターネットによる情報探索も経験した。児童へのインタビューによれば、難しい問題も図書館で調べれば解答を発見できる体験を楽しんだ様子である。このプロジェクトをとおして、大学図書館は調査・相談の面で初等中等教育への貢献も可能である事を発見した。

(はやかわ・かつみつ 附属図書館長、理学部教授)



〔特別寄稿〕 日本発の電子ジャーナル発信を目指して

－ 国際学術情報流通基盤整備事業－

国立情報学研究所 大場 高志

（１）日本の研究成果発信の現状

日本の論文生産力は世界第2位であるが、その論文の約80%は海外の学術雑誌に投稿されており、日本の学術雑誌に投稿されるものは約20%程度に過ぎない。一方、日本の大学図書館は海外の学術雑誌に公表された学術成果を外国雑誌購入費として、買い戻しているが、近年の価格高騰により大学の財政を圧迫させている。このような状況は1990年代欧米では Serial Crisis として知られていたが、日本では2000年代に海外出版社との電子ジャーナル契約が始まるまでは、あまりよく知られていなかった。すでに、欧米では1998年に米国研究図書館連盟（ARL）が SPARC (Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition) 運動を開始し、商業出版社の価格政策に対抗するための様々な活動を行い、研究者、大学図書館、出版社、学会間の学術コミュニケーションを変革しようとしている。

日本の学協会の学術雑誌では①国際的知名度が低いこと、②電子ジャーナル化への対応が不十分であること、③大学図書館等へのビジネスモデルが未成熟であるなどの問題点をかかえており、発行部数減や会員減など継続的に英文論文誌を発行し続けることが困難な状況が続いていた。また、英文学術誌の編集実務に携わる専門的な編集者の人材不足のため、多くの英文学術誌が海外商業出版社から発行されるという状況になっていた。こうした状況の中で文部科学省は平成14年3月に「学術情報の流通基盤の充実について」（審議のまとめ）をまとめ、国立情報学研究所は日本の学術雑誌の電子ジャーナル化を図るとともに、国際的な流通促進のための方策を講じることが必要とされた。

（２）国際学術情報流通基盤整備事業の展開

国立情報学研究所は平成15年度から国際学術情報流通基盤整備事業を開始し、①電子ジャーナル化の促進、②ビジネスモデルの創出、③学

会、研究者、大学図書館への学術コミュニケーション変革への普及活動を目的として、活動を開始した。

電子ジャーナル化促進では、科学技術振興機構とともに、J-STAGE の利用促進や自機関での電子ジャーナルサーバーの支援、海外電子ジャーナルサイトの紹介等を行っている。

ビジネスモデルの創出では、生物系学術誌の電子ジャーナルパッケージ UniBio Press を創設し、10月から J-STAGE 上で認証をかけて販売を始めた。また、物理系学術誌刊行協会や日本金属学会も大学図書館へのライセンス価格の提案を行った。大学図書館は、海外電子ジャーナルへの対応に忙殺され、日本の電子ジャーナルまで考えられない状況ではあるが、日本の学協会が日本の大学図書館に価格提案を開始したことは画期的なことである。

最後に、学術コミュニケーション運動の普及活動では、大学図書館と協力して、大学内セミナーや研究者シンポジウム向けを精力的に行っている。

近年欧米の SPARC 活動はオープンアクセスへ急速に転換しており、学術コミュニケーションの進むべき方向が必ずしも明確でなくなっている。科学技術予算の急増に対応して増大する研究成果の情報発信・流通コストを誰が負担すべきかという古くからの本質的な議論が、電子ジャーナルという舞台上で再び開始されている。

日本の学術雑誌の国際発信や、ビジネスモデルのあり方の問題は研究者、学会、出版社、大学図書館という学術コミュニケーションに関わる関係者間での真摯な議論からしか、進むべき道や解決策は見出しえない。大学図書館は学会へ、学会は大学図書館へ、そして研究者への話しかけ、訴えかけという地道な活動が本事業の根幹であることは間違いない。

(国際学術情報流通基盤整備事業参画学協会誌)

カテゴリー	タ イ ト ル	機 関 名
生 物 系 (UniBio Press)	Mammal Study	日本哺乳類学会
	Journal of Mammalian Ova Research	日本哺乳動物卵子学会
	Zoological Science	社団法人日本動物学会
	Ornithological Science	日本鳥学会
物 理 系	Paleontological Research	日本古生物学会
	Japanese Journal of Applied Physics	物理系学術誌刊行協会
	Journal of the Physical Society of Japan	
Progress of Theoretical Physics		
材 料 系	Materials Transactions	社団法人日本金属学会
数 学 系	Tohoku Mathematical Journal	東北数学雑誌編集委員会
	Kodai Mathematical Journal	東京工業大学理工学研究科数学専攻
	Nagoya Mathematical Journal	名古屋数学雑誌編集委員会
	Proceedings of the Japan Academy. Series A:Mathematical Science	日本学士院
人 文 系	Monumenta Nipponica	上智大学モニュメンタ・ニポニカ
情報通信系	IEICE Transactions	社団法人電子情報通信学会
	IEICE Electronics Express	
	IP SJ Online Journal(仮称)	社団法人情報処理学会
化 学 系	Analytical Sciences	社団法人日本分析化学会
	Polymer Journal	社団法人高分子学会
	Journal of Bioscience and Bioengineering	社団法人日本生物工学会
	Journal of Chemical Engineering of Japan	社団法人化学工学会
	Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry	社団法人日本農芸化学会
医 学 系	Cancer Science	日本癌学会
	Japanese Journal of Physiology	日本生理学会
	Allergology International	日本アレルギー学会
	Drug Metabolism and Pharmacokinetics	日本薬物動態学会
機 械 系	JSME International Journal	社団法人日本機械学会

(参考)

文部科学省：「学術情報の流通基盤の充実について」（審議のまとめ）：

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm

国際学術情報流通基盤整備事業：<http://www.nii.ac.jp/sparc/>

UniBio Press：<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/unibio/-char/ja/>

物理系学術誌刊行協会：http://www.ipap.jp/index_journals.html

日本金属学会：<http://www.soc.nii.ac.jp/jim/>

「夏休み子ども見学デー」レポート！

壽福 千代子



附属図書館では8月25日(水)「夏休み子ども見学デー」を開催した。

大学に地域貢献や地域への公開が求められる今、大学図書館が広く市民に利用され、大学が所蔵する知的財産が活用されるのは望ましいことである。本プログラムは、政府の各省庁が行う「子ども霞ヶ関見学デー」と同時開催し、共通の趣旨のもとに企画されたもので、附属図書館では今回初めての開催であった。実施経過は次のとおりである。

<趣旨>

子どもたちが保護者といっしょに大学図書館を見学して、親子のふれあいを深め、夏休みに広く社会を知る体験活動の機会とする。あわせて大学図書館の業務に対する理解を深めることを目的とする。

<内容>

大学図書館には、学校図書室や地域図書館と異なった業務が存在する。学術情報の蓄積と利用環境の提供、IT時代の電子図書館の実態、情報検索の実演、カタログ作成の重要性、古文

書など貴重資料の保管と電子データ化など、学術研究を支え、文化遺産を後生に継承するための多くの業務が存在する。

子どもたちは、学術情報の蓄積された「書庫」など図書館内を見学するとともに、スタンプラリーに参加して情報調べの実験を体験する。また、デジタル化された古地図や古文書などの超高精細画像の閲覧をとおして、最新情報技術が図書館業務にも重要な役割をもつことをデモンストレーションする。

<募集方法>

- * 図書館ホームページでの広報
- 7月14日(水) 募集パンフレットの配布
附属小、中郡小、田上小、八幡小
- 8月17日(水) MBCラジオ
「今日も元気にCHI・KA・RAこぶ」
(8:40～)で、募集案内放送
- 8月21日(日) 南日本新聞
イベントカレンダー掲載

<参加人数>

31人(児童20人、保護者11人)

<日時・場所>

8月25日(水) 13:00~16:00
鹿児島大学附属図書館

時 間	次 第
13:00 ~ 13:10	受付
13:10 ~ 13:15	開会あいさつ
13:15 ~ 13:25	スタンプラリーの説明
13:25 ~ 13:45	図書館内のあんない
13:45 ~ 14:45	スタンプラリー
14:45 ~ 15:00	休憩、Q & A
15:00 ~ 15:15	高精細画像の デモンストレーション
15:15 ~ 15:45	インタビュー
15:45 ~ 15:50	閉会のあいさつ
15:50 ~	自由見学

<スケジュール>

<実施経過と評価>

大学図書館の仕事をよりよく理解できるように、子どもと保護者が一緒に楽しめるように、家族毎のチーム編成とした。図書館資料を調べて解答を導き出す「情報調べの体験」をしてもらう企画とした。

図書館員が作成した問題を、図書館内の各所に設けられたチェックポイントで調べながら解答していくスタンプラリー形式で実施した。

情報調べの問題は、マルチメディア図鑑(CD-ROM)を使って調べる問題、電動式集密書架を動かして雑誌を探す問題、郷土資料を使って鹿児島の地名や歴史・文化について調べる問題やインターネットを使って解く問題などがあり、各チェックポイントでは図書館員が資料の案内や検索のしかたなどのアドバイスを行った。問題に応じたチェックポイントによって参加者の動線を工夫したり、インターネットによる情報探索も体験できるようにした。

「スタンプラリー」終了後に行った古地図や古文書などの超高精細画像のデモンストレーションにも参加者は熱心に見入っていた。

最後に行った「今日はどうでしたか?」という参加者へのインタビューでは、「難しい問題でも図書館で調べて解答を発見できる体験は、とても楽しかった」という感想が多く聞かれていた。またひとりの児童から「将来、図書館司書を目指したい」という発言もあり、今回の企画に取り組んだスタッフ一同の苦勞が、ねぎらわれた思いであった。

鹿児島大学の附属図書館は、市民にも誇ることのできる立派な施設である。学生・教職員へのサービスに限らず、広く市民の利用に公開されていることを、いろいろな機会をとおして広報し、市民からも親しまれ、支援される図書館として充実させていきたい。

(じゅふく・ちよこ 附属図書館情報サービス課参考調査係長)



平成15年度（第5回）鹿児島大学附属図書館貴重書公開 『産業考古学と斉彬の時代』開催

木場 隆司



平成11年度より始まった附属図書館貴重書公開も回数を重ね第5回となった。平成15年度は「産業考古学と斉彬の時代」というテーマを掲げ、幕末の名藩主・島津斉彬の近代化事業である「集成館事業」について「産業考古学」という新たな視点からスポットを当て、関連する資料の展示、講演会を企画することとなった。また、例年、附属図書館を会場とするほかに、鹿児島市外で展示会・講演会を開催しているが、平成15年度は加世田市での開催をおこなうこととなった。

鹿児島大学会場（附属図書館 AV ホール）

大会会場での開催期間は、平成15年11月5日（水）から11月9日（日）までであった。期間中には、島津斉彬関連本、集成館事業関連資料を展示した。島津斉彬関連本として公開したのは、数学書『西洋算書（せいようさんしょ）』、望遠鏡の製法書『遠鏡製造（えんきょうせいぞう）』、ガラス製法書『硝子製造（がらすせいぞう）』、プロシアの軍事戦術書の翻訳版『三兵答古知幾（さんぺいたくちき）』、西洋の科学技術

機器の解説書『遠西奇器述（えんせいききじゅつ）』などである。いわゆる江戸時代の「洋学」に属する書籍であり、西洋文明の導入に熱心であった開明派君主・斉彬のひとりとなりがしのばれるものである。集成館事業関連資料としては、武雄市歴史資料館所蔵の絵図である『薩州鹿児島見取絵図（さっしゅうかごしまみとりえず）』の写真パネル、集成館とその近辺の復元模型なども展示した。

最終日は本学の関連分野の研究者お二人に講演をお願いした。渡辺芳郎助教授（法文学部）に「幕末から明治初期の薩摩焼」、長谷川雅康教授（教育学部）に「集成館事業を読み解くー産業考古学の視点からー」という演題で記念講演をしていただいた。

（＊講演要旨を当61号に掲載したのでご参照いただきたい。）

講演会に際しては、いつも参加者の集まり具合に気をもんできたが、ふたをあけてみると、用意した席はほとんど埋まり、講演終了後も参加者から質問が相次ぐなど、良好な雰囲気で行うことができた。

加世田市会場（加世田市民会館）

加世田会場での開催期間は、平成15年11月21日（金）から11月23日（日）までであった。大学会場と同じ展示資料のほかに、地元関連資料を新たに出展したが、とりわけ人気があったのが「いろは歌」関連資料であった。「いろは歌」とは、戦国期に加世田近辺を勢力圏とした名将・島津忠良の手になるもので、武士の徳目を和歌の形式に託したものであり、戦国期から江戸時代を通じて島津家武士団の行動規範に影響をおよぼしたとされる一種の道徳律である。加世田市では今でも、「島津忠良」や「いろは歌」にふれる機会が多らしく、市民にとってなじみ深いものである。

また、最終日の講演は、日隈正守助教授（教育学部）に「新田八幡宮の阿多郡支配について」、原口泉教授（法文学部）に「いろは歌の散歩道－歩く道・学ぶ道－」という加世田市に関する演題での記念講演をしていただいた。加世田市周辺の方々60人余りの方に聴講していただくことができた。

展示会をふりかえって

今回の展示会の入場者数は総数411人、講演会の入場者数は総数130人であった。この数字は、入場者数が大きく伸びた昨年と比較するとかなり減少している。ただし、昨年の数字が好調であったのは、テーマのわかりやすさ、地方会場となった国分市が文化祭開催中で会場周辺の人出が多かった、といういくつかの好条件に恵まれたためのものである。平成15年度の入場者数は、数字としては例年並みの水準であったといえる。

広報活動としては、昨年と同様に、報道機関向けのプレ展示、電車の中吊り広告、インターネット展示、前年来場者への案内状送付、などを行った。来場者のアンケートから判断するかぎり、それぞれが一定の効果をあげているようである。しかし、今後の広報方針としては、量的拡大よりも質的拡大、つまり広く一般に周知する手段よりも、郷土史研究会のような歴史資料に興味をもつ層に対して、いかに周知するかをめざすことになるのではないかとと思われる。

（こば・たかし 附属図書館情報サービス課資料サービス係長）



記念講演会

平成 15年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開記念講演要旨

幕末から明治時代の薩摩焼

渡辺 芳郎

薩摩焼は、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592-98年）の際に、島津義弘らが朝鮮から連れ帰った陶工たちによってはじめられた。その後、肥前（佐賀・長崎）・京都・瀬戸などの技術を導入し、多彩な展開を遂げた。それゆえ製品の内容から「薩摩焼」を定義することは難しく、ここでは近世については、島津領（鹿児島県と宮崎県南部）で焼かれた陶磁器の総称として用い、近代では（暫定的に）鹿児島県で焼かれた陶磁器とする。

幕末・明治に海外輸出された「金襴手薩摩」の元となったのは、色絵技術であり、さらにそのベースとなったのが白薩摩である。藩窯である堅野窯場に、おそらく京焼の色絵技術が導入され、白薩摩に色絵が施されるようになった。藩主・島津斉彬（1809～58）は、集成館事業の一環として、安政2年（1855）磯窯を開窯し、色絵薩摩の品質向上に努めたと伝えられる。なお磯窯では反射炉用の耐火煉瓦も、堅野窯の星山仲次らによって焼かれた。一方、苗代川（現東市来町美山）においても、19世紀中頃、堅野窯の技術が導入され、色絵生産が始まった。

そして時代は明治を迎える。明治4年（1871）の廃藩置県により、窯場は藩の保護管理を失い、民間企業として再出発するが、藩による他藩産陶磁器の流入規制も撤廃され、厳しい競争にさらされることになる。しかしその一方、開国による海外貿易の活発化は、新たな国際市場を窯場に提供することになる。

重工業が未発達であった明治政府は、国際市場への参入にあたって、茶や生糸などの農産物とともに、伝統的な手工業品であった漆器・陶磁器などの輸出を重視した。そのアピールの場が万国博覧会である。1862年のロンドン博の際に、駐日英国領事オールコックの日本コレクションが展示されたのを契機に、ヨーロッパにおける日本に対する関心が高まり、「ジャポニスム（日本趣味）」が加熱する。万博で高い評価を得

た金襴手薩摩は、そのブームに乗って、大量に海外へ輸出されるようになる。金襴手薩摩は「SATSUMA」と呼ばれ、ヨーロッパで愛好された。

しかし金襴手製品に対する需要の増大は、他地域における類似製品の出現をもたらした。とくに色絵技術の伝統がある京都（京薩摩）や、輸出港に近い東京・横浜（東京薩摩・横浜薩摩）で「金襴手様式」が生産されはじめ、鹿児島の薩摩焼（本薩摩）は競合を余儀なくされ、また素焼きの半完成品を京都や東京などへ移出するようになった。

また1893年のシカゴ・コロムス博覧会や、1900年のパリ博では、それまでの技巧を重視した金襴手様式の製品に対する評価は下落し、また日本の美術界も、細かい技巧よりも全体的なデザイン性や美術性を重んじる風潮へと転換し、金襴手薩摩は歴史の表舞台から姿を消していく。

しかし明治から昭和戦前期にかけての鹿児島における陶磁器生産額は、大正時代まで増加を続け、本格的に減少するのは昭和に入ってからである（ただし第一次世界大戦（1914-18）時のインフレの影響もある）。万博という国際市場の最前線、あるいは美術界においては評価は下落しても、産業としてはその後もある程度発展を続けたと考えられる。

今後は、美術史としての薩摩焼研究とともに、産業史としての薩摩焼研究が必要であろう。

（わたなべ・よしろう 法文学部教授 異文化交流論）

平成15年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開記念講演要旨

集成館事業を読み解く

－産業考古学の視点から－

長谷川 雅康

1. はじめに

薩摩藩の集成館事業は、幕末から明治初期にかけて藩主斉彬・忠義により推進され、鹿児島近郊磯に築かれた工場群「集成館」を中核に展開された近代化・工業化政策の総称である。同事業は我が国黎明期の近代技術を築き、さらにそれら技術を広い地域に普及させた。その事業は、鑄砲（反射炉）・造船・蒸気機関の研究・製鉄・金属加工・ガラス・製薬・紡績・電信・印刷・製糖など多岐に及んだ。西欧の先進的な科学・技術を短期間に、かつてない程の規模で導入した画期的な事業であった。

この集成館事業に関する研究は、これまで主に文献史料を基に歴史学を中心とする人文・社会科学の側面から多く行われてきた。しかし、そこで実際に使われた諸技術について具体的・技術学的な解明はまだ少数と言わざるを得ない。また、産業考古学の立場からの研究も少ないとみられる。

集成館事業開始から150年後の2001年秋に、私達鹿児島大学の工学系教員を中心とした有志グループが、同事業の技術的側面の解明を目的にした活動を、鹿児島大学の全学プロジェクト「新しい地域学の創造－鹿児島学－」の1グループとして始めた。このグループを基に、今日「薩摩のものづくり研究会」と称して同事業の調査・研究活動を継続している。なお、翌2002年度からは文部科学省科学研究費の特定領域研究、略称「江戸のものづくり」にも公募研究班として加わり、活動している。

2. 産業考古学について

今日の工業化した資本主義社会は、産業革命による生産様式の大転換の所産と考えられる。広辞苑によれば、産業革命（Industrial Revolution）とは、産業の技術的基礎が一変し、小さな手工業的な作業所に代わって、機械設備によ

る大工場が成立し、これとともに社会構造が根本的に変化すること。産業革命を経て初めて近代資本主義経済が確立した。1760年代のイギリスに始まり、1830年代以降、欧州諸国に波及した。

産業考古学という学問は、産業遺産および関連の資料を研究対象として、フィールドワーク調査を中心とする考古学的手法により、人間が築いてきた過去の生産活動の実態を解明し、その歴史的意義を探究する学問である。産業考古学の原語 Industrial Archaeology は1955年にイギリスのバーミンガム大学のリクスが「産業革命の遺跡の研究」と定義したことに始まる。そのころから、イギリスでは産業遺産の全国調査が開始され、地方史研究者に技術者・教育者・一般市民が自主的に協力し、多数の遺跡・遺物が現存地で保存され、野外博物館が建設され始めた。

その代表例がアイアン・ブリッジ峡谷博物館であり、1970年にシュロップシャー州 コールブルックデールで開館した。このコールブルックデールは、イングランド西部セヴァン川流域の地で、18世紀産業革命期に製鉄業の中心地として栄えた。枯渇した木炭に替わって石炭（コークス）を製鉄に利用する技術を世界で最初に成功させた所である。そのコークス高炉の基礎部分が残されていたほか、世界初の鑄鉄橋（アイアンブリッジ）、送風用蒸気機関、坑道、運河インクライン、コールタール・トンネルなど当時の産業記念物が数多く残されていた。今なお、それらを科学的に研究しつつ、それらの保存・普及活動が続けられている。当地には世界から多くの参観者が集まり、賑わいを見せている。

こうした運動の中で産業考古学が生まれ発展し、全ヨーロッパのみならず、アメリカ、日本にも波及した。日本では、1977年に産業考古学会が誕生し、その会員は全国に拡がり、その地

域にある産業遺産の調査・研究ならびにその保存運動に携わっている。例えば、1979年の福岡朝倉重連水車の保存、1984年の横浜新港埠頭赤煉瓦倉庫の保存、1989～1994年の北九州市八幡製鉄所東田第一高炉の保存など全国に渡る数多くの産業遺産の保存運動が、科学的な研究と結びつけた運動として展開されている。

産業・技術の記念物保存については天然記念物と同様に、どの国もすべて人類史的意義を認めるようになってきている。産業考古学は地域文化の重要な側面を未来に伝承する国際的な住民運動の一つと考えることもできる。自然・環境・景観などの保存運動とも深い関係があるといえる。

3. 産業遺産について

産業遺産 (Industrial Heritage) とは、過去・現在の産業活動で重要な役割を果たした・果たしている機械、道具、装置、建築物、構造物、図面、写真などのうち今日に残された有形資料の総体をいう。産業遺産は、存在形態により三つに分類される。

- ① 産業遺跡：土地と切り離せない形で遺存し、複数の遺構、遺物を含む。例えば、工場跡、鉱山跡、鉄道跡、港湾跡など。
- ② 産業遺構：遺跡の中で限定された機能を持つ不動性の建物や構造物、装置を言う。例えば、工場建物、堅坑、高炉、駅舎、橋梁、堰堤など。
- ③ 産業遺物：原位置から切り離して移動できるもの。例えば、工作機械、工具、計測器、自動車、鉄道車輛、図面、写真、文書など。

4. 集成館事業の諸技術の解明

薩摩のものづくり研究会の活動は、2001年度から反射炉、建築、水車動力、工作機械、紡績技術の5分野を選び、それらの総合的研究を目指している。それに加え、2002年度から鹿児島大学などの予算による熔鉱炉の研究も加え、同事業の解明を進めている。それらの中から、具体例をいくつか紹介したい。

- (1) 現地の現状の把握：測量図面の作成
- (2) 建築物の配置の解明：集成館の写真（明

治5年頃撮影)、写真のコンピュータによる解析と建物初期設定図の作成、模型(写真)の製作

- (3) 熔鉱炉跡の探求：薩州見取り絵図、同熔鉱炉図、測量図、現地(鶴嶺神社内)レーダー・磁気探査、レーダー探査解析図、磁気探査結果図、発掘現場写真、レーダー探査解析図Ⅱ

5. おわりに

今後の課題としては、これまで取り上げてきた分野の解明を継続して進める。それに加えて、新たに民需の技術分野を解明する。それらの成果を基に、集成館事業の全体像をより具体的に画くことを目指したい。こうした仕事は、他地域の研究との連携や地域の市民との連携を強化することを通して行うものである。

産業遺産の解明は、その地域の市民が関心を持ち、その保存のための運動がともに行われてこそ、本来の実を結ぶものと考え。そのことを通して、地域の文化が永く受け継がれてゆくと想う。そのための素材を科学的に明らかにすることが私どもの仕事と考え、一步一步進めて参りたいと念じている。皆様のお力添えを宜しくお願い申し上げる次第である。

(はせがわ・まさやす 教育学部教授、薩摩のものづくり研究会代表)



研究紀要の投稿規程における著作権処理に関する調査

宮里 昌代

平成14年度から国立情報学研究所の研究公開支援事業として、大学等の発行する研究紀要を電子化し、インターネットを通じて広く一般に公開しています。鹿児島大学でも平成14年度－15年度にかけてこの事業に参加しました。

研究紀要の電子化と公開にあたっては、研究紀要に収録された個々の論文の著作権処理が不可欠となります。

平成16年6月に学内刊行の研究紀要について、著作権処理の投稿規程への明記について調査を行いました。その結果が下の表であり、投稿規

程のなかったものについてはその内容・発行形態によるもの、また現在審議中であるもの等がありました。今回電子化及び公開している研究紀要（表に※を付したもの）については、現在審議中のものも含め著作権処理済みとの回答を得ています。

今後、学内から広くインターネットを通じて学術情報を発信していくためにも、全ての学内刊行物に著作権処理事項を明記した投稿規程が盛り込まれることが望まれます。

刊 行 物 名	投稿規程の有無	著作権記述の有無	記 述 内 容
* 『鹿児島大学法学論集』（鹿児島大学法文学部紀要）	×	×	
『経済学論集』（鹿児島大学法文学部紀要）			
『人文学科論集』（鹿児島大学法文学部紀要）			
『国語国文薩摩路』（鹿児島大学法文学部国語国文学会誌）			
『鹿大史学』（鹿大史学会誌）			
『鹿大英文学』（鹿児島大学英文学会誌）	○	○	鹿児島大学教育学部(紀要編集委員会)に帰属
* 『鹿児島大学教育学部研究紀要：人文・社会科学編』			
* 『鹿児島大学教育学部研究紀要：自然科学編』			
* 『鹿児島大学教育学部研究紀要：教育科学編』			
* 『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』	○	×	
『verba：鹿児島大学言語文化論集』			
『鹿児島大学附属養護学校研究紀要』	×	×	
* 『鹿児島大学理学部紀要』	○	○	鹿児島大学理学部に帰属
『鹿児島大学医学雑誌』	○	○	鹿児島大学医学会に帰属
『鹿児島大学医学部保健学科紀要』	○	×	
* 『鹿児島大学歯学部紀要』	○	○	鹿児島大学歯学部帰属
* 『鹿児島大学工学部研究報告』	○	○	鹿児島大学工学部に帰属
* 『鹿児島大学農学部学術報告』	○	○	鹿児島大学農学部紀要編集委員会に帰属
* 『Memoirs of the Faculty of Agriculture, Kagoshima University』			
『鹿児島大学農学部農学部農場研究報告』	○	○	鹿児島大学農学部農場編集委員会に帰属
* 『鹿児島大学農学部農場技術調査報告書』	×	×	
* 『鹿児島大学農学部演習林研究報告』	○	○	鹿児島大学農学部演習林研究報告編集委員会に帰属
『鹿児島大学水産学部紀要』	○	○	鹿児島大学水産学部帰属
『Bulletin of marine resources and environment, Kagoshima University』	×	×	
『南太平洋研究』	○	○	鹿児島大学多島圏研究センターに帰属
『南太平洋海域調査研究報告』	×	×	

(みやざと・まさよ 附属図書館情報管理課学術コンテンツ係)

平成16年度大学図書館職員長期研修報告 e-ラーニングと図書館の接点

大瀧 礼二

平成16年7月5日から16日までの日程で開催された「平成16年度大学図書館職員長期研修」に参加した。昨年度までは3週間の日程で実施されていたが、カリキュラムの見直しが行われ今年度は2週間となった。それでも「長期」と冠されるだけの長丁場であり、講義・討議・見学等が毎日4コマ組まれる盛りだくさんの内容だった。

講義では、現在の担当業務である利用者サービスと関わるものに関心があったが、中でも三輪眞木子氏（メディア教育開発センター教授）による「e-ラーニングと大学図書館」の講義は興味深かった。e-ラーニングとは何か、ということから始まり、海外の事例、国内の事例の紹介の後、e-ラーニングと大学図書館の接点はどこにあるのかについて、話があった。

e-ラーニングの定義は様々であるが、この講義では「ネットワークを使う学習形態の総称」であるとして、「双方向であるか片方向であるか」と「時間自由であるか時間指定であるか」の座標軸によりいくつかのタイプに分類して示されていた。インターネットやイントラネットを利用するWBT（Web-based training）型（双方向・時間自由）や、VOD（Video-on-demand）型（片方向・時間自由）、TV会議型（双方向・時間指定）等がある。「誰でも、どこにいても、学習資源にアクセスができる」ことがe-ラーニングの特長である。講義の中で紹介された信州大学のインターネット大学院では、受講者として、企業等に勤める人の他に主婦や障害者も含まれており、e-ラーニングの特性が生かされた好例と言える。

国内外の事例は、WBT型のシステムを中心に紹介された。「教授者へのサポート」と「受講者へのサポート」がポイントとして繰り返し言及されていた。

教授者としてe-ラーニングを担当する際の大きな負担の一つは、教材の開発である。これには技術的な面での負担だけでなく、教材化する

にあたっての著作権の処理といった負担も大きい。このための支援を行うことが必要とされる。合わせて、e-ラーニングを担当することがボーナスや昇進に結び付くというように、待遇を充実させることも、教授者の担当意欲を高める重要な要素であることが指摘されていた。

受講者へのサポートでは、ヘルプデスクの開設等、学習環境を整備することの他に、コースの最初に集中合宿を行ったり対面授業を行ったりすることによって、教授者と受講者、受講者相互の人的ネットワークを作る工夫がとられることもある。

また、これらの前提として、e-ラーニングに適した科目とそうでないものがあることにも、講義では触れられていた。ハードサイエンスのように理論を扱う科目には向いているが、実験・実習等を必要とする科目やソフトスキル（社会的スキル）を必要とする科目には、適していないとのことである。

図書館はe-ラーニングとどう関わっていくことができるのか。講義では、受講者へのサポートとして、従来から図書館が行っている資料の貸出・複写サービス（郵送・FAX）や、レファレンスサービス（電子メール等によるデジタルレファレンス）が挙げられていた。

一方、教授者へのサポートは若干趣が異なっており、教材開発支援としての資料のデジタル化や、デジタル著作権の権利処理が挙げられている。また、開発された教材を共同で評価し共有していこうとする「高等教育教材ゲートウェイ」の取り組みが各国で行われており、北米を初めとするいくつかの事例が紹介されたが、教材に関するデータを共有するためのメタデータの作成や、ゲートウェイの構築・活用といった面も、図書館が関わっていくことのできる領域として挙げられていた。

この研修では、講義等により知識を得ることはもちろんだが、他の受講者（今回は42名が受講）からも様々な刺激を得ることができた。知

識の豊富な受講者が多く、新しい取り組みに積極的に関わっている姿勢には見習うべき点が多かった。

日本での e-ラーニングについて、講義の中では先述の信州大学の他に名古屋大学、岐阜大学の事例が紹介されたが、まだ新しい試みであり、図書館がどこまでどのように関わっていいのかについても、今から模索していく段階の

ようである。しかし、このような新しい動向に常に目を配り、必要な知識やスキルを積極的に身に付けていく姿勢がこれからますます求められていこうと、この研修を通じて感じた。

(おおたき・れいじ 附属図書館桜ヶ丘分館情報サービス係長)

本学関係者著作寄贈図書

附属図書館では、本学関係者の著作を収集しています。

著作刊行の際は、ご寄贈くださるようお願いいたします。

今回は、次の方々から著書をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。

中央図書館

寄 贈 者	寄 贈 図 書
永 田 行 博 (鹿児島大学長)	寿命の遺伝子から考える：医学部教授のたわごと独り言／永田行博著 東京：文芸社、2003. 3
小 栗 実 (法文学部教授)	現代イギリス法事典／戒能通厚編、小栗実 [ほか] 著 東京：新世社、2003. 2
久 留 一 郎 (教育学部教授)	PTSD：ポスト・トラウマティック・カウンセリング／久留一郎著 東京：駿河台出版社、2003. 2
久 留 一 郎 (教育学部教授)	スクールトラウマとその支援：学校における危機管理ガイドブック／W. ユール、A. ゴールド著、久留一郎訳 東京：誠信書房、2001. 11
久 留 一 郎 (教育学部教授)	発達心理臨床学：病み、悩み、障害をもつ人間への臨床援助的接近／久留一郎著 京都：北大路書房、2003. 4
皆 村 武 一 (法文学部教授)	戦後奄美経済社会論：開発と自立のジレンマ／皆村武一著 東京：日本経済評論社、2003. 7
神 田 嘉 延 (教育学部教授)	ベトナムの自立発展と生涯学習／神田嘉延、ファム・フー・ロイ、関隆通著 東京：高文堂出版社、2003. 11
坂 脇 昭 吉 (教育学部教授)	マンチェスター時代のエンゲルス：その知られざる生活と友人たち／ロイ・ウィトフィールド著、坂脇 昭吉、岡田 光正訳 京都：ミネルヴァ書房、2003. 9
神 田 嘉 延 (教育学部教授)	環境問題と地域の自立的発展：離島・へき地を中心にして／神田嘉延編 東京：高文堂出版社、2004. 2
中 島 あやこ (法文学部教授)	源氏物語の構想と人物造型／中島あやこ著 東京：笠間書院、2004. 1
住 吉 文 夫 (工学部教授)	超伝導応用の基礎／松下照男編、住吉文夫 [ほか] 著 市川：米田出版、2004. 2

寄贈者	寄贈図書
佐藤正典 (理学部助教授)	水俣学講義／原田正純編著、佐藤正典著 東京：日本評論社、2004. 3
鎌田薩男 (名誉教授)	分析化学：溶液反応を基礎とする／大橋弘三郎、鎌田薩男 [ほか] 著 東京：三共出版、1992. 3
川上正之 (理学部教授)	C#で運動を見る／川上正之著 京都：松香堂、2004. 8
小栗有子 (生涯学習教育研究センター)	教育と持続可能性グローバルな挑戦に因えて／Daniella Tilbury [ほか] 編、小栗有子、降旗信一監訳 鹿児島：レスティアー、2003.12
宮嶋公夫 (理学部教授)	Complex analysis in several variables : memorial conference of Kiyoshi Oka's centennial birthday, Kyoto/Nara 2001/edited by Kimio Miyajima [et al.] Tokyo : Mathematical society of japan, 2004

桜ヶ丘分館

寄贈者	寄贈図書
永田行博 (鹿児島大学長)	寿命の遺伝子から考える：医学部教授のたわごと独り言／永田行博著 東京：文芸社、2003. 3
永田行博 (鹿児島大学長)	研修医／コ・メディカルのための中高年女性医学入門：Health Ageing を目指して／永田行博企画編集 大阪：医薬ジャーナル社、2003.4
仙波伊知郎 (歯学部助教授)	分子生物学歯科小事典／花田信弘ほか編；仙波伊知郎ほか執筆 東京：口腔保健協会、2003. 6
仙波伊知郎 (歯学部助教授)	国際歯科保健医療学／中村修一編；仙波伊知郎ほか執筆 東京：医歯薬出版、2003.10
三井島智子 (名誉教授)	Life and body body and life / Tomoko Miishima ; translated by Shihomi Toba Tokyo : Green Press, 2003. 9
平明 (名誉教授)	社会と医療／平明著 福岡：丸善福岡出版サービスセンター、2003.12
伊藤学而 (名誉教授)	カウンセリングで治す顎関節症／伊藤学而編著；黒江和斗、永田順子、梶原和美著 東京：医歯薬出版、2004. 3
伊藤学而 (名誉教授)	口と顔のコミュニケーション：新しい関係性の歯科医療／伊藤学而編著 京都：あいり出版、2004. 3

水産学部分館

寄贈者	寄贈図書
越塩俊介 (水産学部教授)	養殖魚の健全性に及ぼす微量栄養素／中川平助、佐藤実編；越塩俊介、石川学ほか執筆 東京：恒星社厚生閣、2003
石川学 (水産学部助手)	養殖魚の健全性に及ぼす微量栄養素／中川平助、佐藤実編；越塩俊介、石川学ほか執筆 東京：恒星社厚生閣、2003
大富潤 (水産学部助教授)	かごしま海の研究室だより／大富潤著 鹿児島：南日本新聞社、2004. 3
四宮明彦 (水産学部教授)	改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物：レッドデータブック／環境庁自然保護局野生生物課編；四宮明彦ほか執筆 東京：自然環境研究センター、2000. 2
四宮明彦 (水産学部教授)	鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物：鹿児島県レッドデータブック：動物編／鹿児島県環境生活部環境保護課編；四宮明彦ほか執筆 鹿児島：鹿児島県環境技術協会、2003. 3

Library News

◆ 超高精細画像の作成

平成15年度教育改善推進費（学長裁量経費）により、本学所蔵の玉里文庫の中から、特に資料的価値の高い絵図5点を選び、ZOOMA*の技術を用いて電子画像化し、図書館ホームページ（貴重書公開）から閲覧できるようにしました。これにより、精細な画像のまま画面上で自由に拡大・縮小・スクロールしながら快適に資料を閲覧することができます。

ZOOMA：高解像度画像データをスピーディーに表示するビューワ、データを細かいメッシュ構造に分割して、必要なパーツを表示するため高精細な画像のまま高速表示が可能

本公開画像データ作成資料は、次の5点。

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1. 文政五年鹿児島城絵図 | 1 舗 (1 5 8 × 2 7 0 cm) |
| 2. 御江戸大絵図 | 1 舗 (1 2 0 × 1 3 4 cm) |
| 3. 蝦夷圖境輿地全図 | 1 舗 (1 2 5 × 1 0 0 cm) |
| 4. 三州割拠図 | 1 巻 (4 0 × 8 3 7 cm) |
| 5. 琉球人行粧之図 | 1 巻 (1 6 × 9 2 4 cm) |

◆ オンラインでの研究用図書申込（教員）サービス開始

研究用の図書の注文は、これまで「図書購入申込書」に記入していただいていたのですが、このたび、図書館ホームページのオンラインリクエスト・メニューから申込みサービスを開始しました。注文後の入荷状況も参照できます。

◆ 国立情報学研究所（NII）との協同遡及入力

—岩元文庫、小北文庫、小野文庫の遡及入力完了—

附属図書館と国立情報学研究所（NII）では、平成15年度の協同図書目録遡及入力事業により、岩元文庫（洋書）、小北文庫、小野文庫等、7,290冊の遡及入力を行いました。この事業は、NACSIS-CAT（総合目録データベース）に未登録の特殊資料を集中的に登録して、利用者の学術情報へのアクセスを確保するとともに、全国的な遡及入力を促進することを目的としています。

図書館のOPAC（蔵書検索）及びNIIのWebcatから検索できますので、ご利用ください。

◆ 諸家文書目録の公開

附属図書館では、玉里文庫などの貴重資料を所蔵していますが、次のような古文書（諸家文書）も所蔵しています。これらは、これまで目録が整備されておらず、利用する上で不便でしたが、このたび、資料そのものを一点毎に中性紙封筒に収めて整理し、目録も一覧できる表形式にして、図書館ホームページ（貴重資料の紹介）から閲覧できるようにしました。

古文書名：市来家文書、山田家文書、有馬家文書、斑目家文書、肝付家文書、川田家文書
寺尾家文書、志々目家文書、伊勢家文書、八田家文書、木脇家文書、伊集院家文書
長野家文書、新納家文書

編集後記

昨年国立大学法人化を前にして、不安と焦燥の一年であった。言い訳ながら法人化対応で何かと気忙しく、「南風」も刊行せず、編集子も心苦しい限りである。遅ればせながらここに61号をお届けします。なお、今回は、国立情報学研究所の大場氏に原稿をお願いしたところ快く引き受けていただき、ここに厚く御礼申し上げます。（編集子M）